

# トマスにおける実践知の構造

— 思慮と行為の重層性 —

松 根 伸 治

行為の場面ではたらく認識や推論のはたらきを、さしあたりゆるやかな意味で「実践知」と呼ぶことにしよう。このような実践知をトマスに即して考える場合、様々なアプローチが考えられるが、この論文では特に「思慮 prudentia」の議論に注目し、トマスの言う思慮は私たちが思い浮かべるよりもかなり幅広い概念であることを確認したい。その際、『神学大全』第2部冒頭の行為についての理論を、思慮の説明と重ねあわせて読むことが有効ではないか、というのがひとつの具体的な提案である。

## 1 思慮の位置づけ——思慮と倫理徳の関係

はじめに、トマスが思慮を他の様々な徳との関連においてどのように位置づけているかを確認しておこう。意志をにない手として成り立つ正義や、感覚的欲求能力の完成である勇気や節制は、もっぱら実践の領域に関わる徳で、これらを中心とする諸々の徳が「倫理徳」と総称される。これに対して思慮は、理性を完成するものとして、ひとまず「知的徳」に分類される。しかし、知的徳のなかで思慮だけには、倫理徳の側面をももつという独特の位置が与えられている。トマスの議論を整理すると、思慮のこのような位置づけは以下の三つの理由によるものである。

ひとつは対象の共通性である。「思慮はその本質の点では知的徳であるが、しかし、その対象領域に即して言えば倫理徳と一致する。」(ST I-II, q. 58, a. 3, ad1) 人間のどんな能力をにない手としてその徳が実在するかという観点から考えると、理性において成り立つとされる思慮は、たしかに知的徳であると言える。しかし他方で、思慮が関わるのは思弁的領域ではなく、実践の領域、行為の世界であるから、この点では倫理徳と呼ぶこともできる。

ふたつめの理由は、思慮が「端的な意味での徳」だということである。他の知的徳

(=sapientia, intellectus, scientia, et ars) はすべて、限定された意味での徳であるのに対して、思慮だけは他の倫理徳と並んで、人間的な徳、端的な意味での徳であると言われている (I-II, q. 56, a. 3, c; q. 61, a. 1, c)。現実の個々の行動と人格そのものに関わる習慣だということである。この意味でたしかに、思慮を知的な認識能力の完成と見るだけでは不十分である。倫理徳とのこのような共通性は、四つの枢要徳<sup>1)</sup>のなかに思慮があげられることにも反映している。

思慮が知的徳でありながら、倫理徳の性質ももつと考えられる第三の理由は、思慮と倫理徳との強い結びつきである。トマスはこれを、「倫理徳は知的徳なしにありうるか」「知的徳は倫理徳なしにありうるか」という形で問題にしている。そして、倫理徳は思慮という知的徳なしにはありえないし、また逆に、思慮という知的徳は倫理徳なしにはありえない、と言う。

まず、倫理徳は思慮なしにはありえないというトマスの議論をとりあげよう (I-II, q. 58, a. 4, c)。倫理徳とは人間に善い選択をおこなわせる習慣である。ところが、選択が善くあるためには二つの条件が必要とされる。第一に、ふさわしい目的をめざすように、倫理徳によって精神が整えられていなければならない。欲求能力が常に理性に従うように完成され、完全に調和のとれた心の状態が実現するとき、適切な形で目的が見えてくる。ただしこの段階は一般的・抽象的な意図の段階である。正義・勇氣・節制などの倫理徳だけでは、人間は個々の場面で実際に正しい行動をおこなうことはできない。そこで第二に、より具体的な手段のレベルで、善い選択をおこなうための条件が考えられる。手段に関わる思案・判断・命令といったはたらきをになうのが思慮の仕事とされる (I-II, q. 57, a. 6, c; II-II, q. 47, a. 8, c)。したがって、倫理徳はその現実化・具体化の場面で思慮を必要とする。これが、倫理徳は思慮なしにはありえないと言われる意味である。

もし仮に、思慮はないまま倫理徳だけが成立している人間というものを考えることができるのであれば、その人は原理原則のレベルでは人柄が非常に完成されていて、ふさわしい目的を意図しているけれども、それが現実の具体的行為にまるで反映されない奇妙な人ということになる。あるいはむしろ次のように言うほうが正確かもしれない。倫理徳は、最終的に現実の個々の善い具体的行動に結びつかない限り、徳とは言えないから、倫理徳が成立しているとすればそこにはどうしても思慮が同時に成立しているのだから、と。倫理徳は身につけているが思慮のない人というの

はそもそもありえないのである。トマスがアリストテレスを引用して、倫理徳は正しい理性そのものではなく、単に正しい理性に従っているだけでなく、むしろ「正しい理性を伴っている」と言うのは、このような意味に理解できる (I-II, q. 58, a. 4, ad3. cf. Aristoteles, *EN*, 1144b17-30)。

次に、知的徳に分類されるもののうち思慮だけは倫理徳なしにはありえないという主張の要点を見てみよう (I-II, q. 58, a. 5, c)。思慮はふさわしい目的の把握や意図を前提とするから、今度は、目的を正しくとらえることがその人にとって親和的なこと、いわば自然なことになっている状態が、思慮ははたらく条件となる。だから、非常に思慮深いけれども、欲望や感情と理性とのバランスを欠いて、目的の認識がくもっている人、つまり思慮はあるが倫理徳はない人も原理的にありえない。日常の言葉づかいでは、たとえば思慮深いが臆病といった性格も考えられるが、これはトマスに言わせれば、本当の意味での思慮をそなえた人ではないということになる。

このように考えてくると、思慮と倫理徳の関係を考える場合には、両者の「循環」や「順序」という点に焦点を絞るべきではなく、そもそも諸々の徳が切り離しがたい形で強く結びついてはたらく点<sup>2)</sup>、そして思慮がそれらの徳を結びつけるかなめになっている点<sup>3)</sup>こそがトマスの主張の眼目である。このことを確認するために、思慮の優位が述べられているテキストを以下にあげておこう。

諸々の倫理徳が関わることで全体の全体が、思慮というひとつの側面のもとに入ってくる。(I-II, q. 65, a. 1, ad3)

思慮はある意味で、すなわちそれが諸徳を導くものであるという意味で、すべての徳に分有されている。(II-II, q. 53, a. 2, c)

倫理徳が徳の性格をもつのは、知的徳を分有する限りにおいてである。(II-II, q. 47, a. 5, ad1)

思慮は倫理徳よりも高貴であり、それらを動かす。(II-II, q. 47, a. 6, ad3)

思慮はすべての徳を助け、すべての徳においてはたらく。(II-II, q. 47, a. 5, ad2)

徳の成立の時間的順序が問題なのではなく、思慮が諸々の倫理徳を導き、それらに浸透し結びついているという面に強調点があることがわかる。

## 2 行為の重層性——行為のモデル化の試み

トマスが思慮に与えた独特の位置づけを確認してきたが、それでは具体的に、人間の行為において思慮はどのような役割をはたしていると言えるだろうか。このことを次のような二段がまえの議論で考えてみたい。まずこの章では、思慮について直接論じたテキストからはひとまず離れて、トマスが人間の行為の構造をどのように分析しているかを見る。そして、そこで得られる見通しが、思慮のもつ構造を考える際の重要な手がかりになることを第3章で示すことにする。

まず一般的に、目的と手段という点から人間の行為を考えると、

- ① ある目的をめざし、
- ② その目的にかなった手段を様々に思いめぐらし、
- ③ 選択肢のうちから、最もふさわしい手段を決め、
- ④ こうして、現実の具体的な行動をおこなう。

このような段階あるいは層を取り出すことができる。具体的な事例で説明してみよう。私が健康という目的を心にいだいているとする（①意図の層）。この意図のもとで私は、健康になるための手段をあれこれ考える（②思案の層）。思案の最初の段階では多くの手段が示されるだろう。スポーツジムに通う、通信販売で健康器具を手に入れる、店で健康食品を買う、ジョギングをする、規則正しい生活をする、などなど。私をとりまく具体的状況、たとえば金銭的条件や社会的立場、あるいは身体的特質などに照らしながら、これらの手段を比較し、実現可能でふさわしい選択肢をいくつか思いつく。しかしこの段階では行為を実現する決定力にはならない。ここからさらに進んで、たとえばジョギングをするというひとつの手段を選びとらなければならないからである（③決断の層）。そして——これがまたひとつの目的となり、同じような連鎖を繰り返してもさしつかえないが——具体的な行為へのうながしが起きる。朝6時に起き、このジョギングシューズを履いて、といった身体の動きを命じるはたらきがあって（④実行の層）、現実の行動として私は走り出す。

トマスは『神学大全』第2部-1・第11~17問題で、行為を成り立たせる様々な局面・要素を詳しく論じている<sup>4)</sup>。この箇所では説明される諸要素の関係を、今述べた①~④の層に関連づけて整理することにしよう。

①意図の層。目的に到達しようとしてそれをめざす意志のはたらきが《意図

intentio》である。この意図のはたらきは理性によって目的へと方向づけられている (I-II, q. 12, a. 1, ad3; a. 3, ad2)。何かをめざすには、それを《把握 apprehensio》していることが前提となるからである (I-II, q. 15, a. 3, c)。こういうわけで、理性による目的把握と意志による意図、この一対の要素をまず《意図の層》として位置づけることができるだろう。ここで意図された目的をめざして、具体的な手段に関するはたらきがおこなわれる。

② 思案の層。これ以降の層はすべて、目的よりはむしろ手段に関わるものである。トマスは実践の場ではたらく理性の機能として、《思案、判断、命令》の三つをあげる<sup>5)</sup>。別の箇所では、手段に関わる意志の機能として、《同意、選択、行使》の三つがあがっている<sup>6)</sup>。これから述べるように、この三つ組のそれぞれを関連づけるのが最もわかりやすい形だと思う。——ただし、トマスの論述自体はこのようにすっきりと示されているわけではない。行為の構造ということがら自体の複雑さと、思想史上の様々な概念<sup>7)</sup>の整理の難しさによって、論述が多少込みいったものにならざるをえなかったのは当然だろう。ここで私が試みるのは、トマスの行為の理論について、できるだけ整合的でわかりやすい枠組みあるいは全体像を、テキストにもとづいて再構築しようとする作業である。

さて、目的にふさわしい手段をあれこれ探し求めるはたらきが《思案 consilium》である。そして、理性のおこなう思案と対にして語られるのが《同意 consensus》である。同意とは「思案が定めたものへと欲求の運動を適用する」意志のはたらきだとされる (I-II, q. 15, a. 3, c)。この段階では複数の手段が提示される可能性があるが、選択すべき手段がひとつしかない場合や、何を選んでも大差ない場合には思案の段階は必要ない (I-II, q. 14, a. 4, c; q. 15, a. 3, ad3)。こうして、《思案の層》に含まれるモメントとして、理性による思案と意志による同意とを考えることができる。

③ 決断の層。意図と思案の段階を現実の具体的な行動へと結びつけるためには、さらに決断のステップが必要である。行動は思案の単なる延長ではないからである。ここでは、思案の層で示されたいくつかの行為の選択肢のうちから、目的にとって最もふさわしい手段を見出す《判断 iudicium》と《選択 electio》がおこなわれる、と整理することができる (I-II, q. 13, a. 1, ad2; a. 3, c)。選択というはたらきには理性的要素と意志的要素とが合流しており (I, q. 83, a. 3, c; I-II, q. 13, a. 1, c)、アリストテレスはそれを「欲求的知性あるいは知性的欲求」と表現した (EN, 1139b4)。トマスは

選択を、理性のはたらきを前提とした意志のはたらきとする。選択というのはたらきを最終的におこなっている実体としては意志という能力を考えるのである (I-II, q. 13, a. 1, c)。こうして、理性による判断と意志による選択とが《決断の層》を構成することになる。

④ 実行の層。この層は、内的行為の終結であると同時に外的行為の端緒である。現実の具体的行動への適用の場面には、その行為をなせという《命令 imperium》と、現実に能力や身体を動かすための《行使 usus》というのはたらきを位置づけることができる。命令は意志のもつ動かす力を前提としているが、本質的には理性のはたらきであり (I-II, q. 17, a. 1, c)、同様に、行使は理性に導かれることを前提とした意志のはたらきであるとされている (I-II, q. 16, a. 1, c)。このようにして《実行の層》には、理性による命令と意志による行使が含まれる。

以上の考察にもとづいて、トマスの考えている行為の構造を次のようなモデルとして示すことができる。

#### 行為のモデル

① 意図の層	把握 (apprehensio) + 意図 (intentio)	目的の志向
② 思案の層	思案 (consilium) + 同意 (consensus)	手段の検討
③ 決断の層	判断 (iudicium) + 選択 (electio)	手段の採択
④ 実行の層	命令 (imperium) + 行使 (usus)	現実の行動

術語としてトマスが実際に使っているのは、中央の「理性のはたらき + 意志のはたらき」の名称である。それらのはたらきを、目的と手段に対する関わりの視点から関連づけ、上のような四層の構造に整理して考えることができるだろう<sup>8)</sup>。それぞれの層のなかで、対象を提示し行為を方向づける理性のはたらきと、その実現の駆動力となる意志のはたらきとが連携している点が理解の鍵である。しかし、次のようなテキストでは、理性と意志とが交互にはたらいは休み、休んではまたはたらくプロセスが考えられているようにも見える。

すべての意志のはたらきが命令という理性のこのはたらきに先立つわけではない。あるはたらき、つまり選択はこれに先行し、あるはたらき、つまり行使はこれに

後続する。なぜなら、思案による決定（これが理性の判断である）の後で意志が選択をおこない、その選択の後で理性が、選択されたことをおこなうべき相手に命令するのであり、それからようやく、ある人の意志が理性による命令を遂行することによって、行使のはたらきを始めるのだからである<sup>9)</sup>。

ここでははたらきの前後関係がまさに問題になっているので、「より先」「より後」ということを強く意識した説明になっている。しかし一般には、理性、意志、理性、意志、……という交互のはたらきを図式的に考えるべきではない。左右に理性と意志それぞれのはたらきを並べ、それらが上から下へジグザグにはたらくというような図解をトマスの考えとして提示するべきではないし、また、理性と意志のはたらき方を、ある瞬間にはどちらか一方だけのスイッチがオンになり、もう一方はオフになるというような連想でとらえるべきではないのである。

各々の行為の構成要素は厳密には理性と意志のどちらかのはたらきとして振り分けられるとしても、理性と意志が結びつき浸透しあってはたらいっている点がトマスの説明の主眼である。たしかにトマスは理性と意志とを明確に区別された二つの能力として考えているが、両者の関係を端的に表すのは、「理性と意志はお互いに包含しあっている」(II-II, q. 109, a. 2, ad1; I, q. 16, a. 4, ad1) というテーゼである。とりわけ人間の倫理的行為を考える場面では両者の相互作用や密接な結びつきを強調するべきである。行為のモデルでは、ある層のなかで理性と意志とが相互依存のあるいは相互補完的にはたらいっている点に注目するのがよい。さらに、ある層でののはたらきの結果が次の層のはたらきへと反映していく、重層的な構造になっている点も重視するべきである。次のテキストはこのことをはっきりと示している。

より先のはたらきの力がそれに続くはたらきのうちに残るのだから、ときには、そこに理性のはたらきのいくぶんかが潜在的に残っていることによって、意志がはたらく場合がある。〔中略〕また逆に、そこに意志のはたらきのいくぶんかが潜在的に残っていることによって、理性がはたらく場合もある<sup>10)</sup>。

以上のように、人間の行為を考える場合に、理性と意志それぞれの機能を局面ごとに取り出し、それを意図・思案・判断・選択・命令などの構成要素として分節化し規

定したうえで、さらに今度は、これらを相互に関連しあうものとしてあらためてとらえ直すことができる。それでは、それら諸要素のいわば有機的結合からなる理性的なプロセスの全体をつらぬき、その活動にひとつの行為としての明確な形を与えているものは、そもそも何だろう<sup>11)</sup>。それがまさに実践知としての思慮、「なすべきこと」がらについての正しい理性 *recta ratio agibilium* (I-II, q. 57, a. 4, c., et passim) たる思慮だと言えるのではないか。

### 3 思慮の重層性——目的・思慮・行動

前章で見てきた「行為の理論」と、思慮がおもに語られる「徳の理論」とは、トマスの倫理思想のなかでかなり異質な文脈をなしているようにも思われる。しかしここでは、これらの文脈をあえてすりあわせることによって、あるいは横断することによって、トマスの一貫した見方を取り出してみたい。そうすることによって、人間の実践的活動の全体を広くおおい、行為の中枢に関わる実践知という、思慮の性格が浮かびあがってくるはずである。

まずはじめに、前章で見た行為の構造が思慮のもつ構造に対応している点に注目しよう。思慮の活動は、目的にいたるための手段に関して「思案すること *consiliari*」「判断すること *iudicare*」「命令すること *praecipere*」の三つであるとされる (I-II, q. 57, a. 6, c; II-II, q. 47, a. 8, c)。これらの要素は、先に提示した行為のモデルでの、手段に関わる理性のはたらきにちょうど対応していることがわかる。行為をおこなう際に、(1)自分のおかれている状況を熟慮し、目的にふさわしい行動の選択肢を慎重に思いめぐらすこと、(2)その選択肢のうちから最もふさわしい行動を決断し、選ぶこと、(3)そして最終的にこれを実行に移すこと、これらのはたらきを思慮という徳がになっている。そしてこの三つのなかでも、実践的領域での理性だけに固有なはたらきが思慮の本来の機能だとされる。すなわち、思案と判断との結果を外界へ向けて具体化し、現実の行動として結実させる段階、つまり「命令」のはたらきこそが最も主要な意味で思慮の活動であることが、繰り返し強調されている (I-II, q. 57, 6, c; ad2; II-II, q. 47, a. 1, ad3; a. 8, c)。

このように、思慮は人間の行為の少なくとも具体的手段の思案・決断・実行のレベルのすべてを通してはたらく徳である。したがって、トマスの考えている *prudentia* は、私たちが「思慮」という日本語で思い浮かべるはたらきに比べて、かなり広範囲



にわたっているし、そのはたらきの特質も異なることがわかる。というのは、ふつう思慮とは注意深く慎重にあれこれ思いめぐらすというような意味だが、これに対して、トマスの言う *prudentia* は最終的な命令の段階こそが本領であることを見落としてはならないからである<sup>12)</sup>。

こうして、現実の具体的な行動に最も近づいた段階 (= 実行の層) ではたらいっている徳こそが、本来の意味、狭い意味での思慮であると言うことができる。そして、このような思慮のはたらきは、人間の心の内的な作用と、実際に手足を動かしておこなう外的な行動との結節点であり、それらを最終的にひとつの行為として統合するはたらきをしている<sup>13)</sup>。

思慮が行動の実行に直接つながっているということに加えて、もうひとつ注意すべき点がある。それは、「思慮が手段に関わる」というトマスの言い方についてである (I-II, q. 20, a. 3, ad2; q. 57, a. 5, c; q. 65, a. 1, c; II-II, q. 47, a. 6, c. cf. *EN*, 1144a8)。「倫理徳は目的に関わり、思慮は手段に関わる」という誤解をまねきやすい定式化がおこなわれて、あらかじめ外部から目的が与えられ、その後で思慮が具体的な方法の考察だけでもっぱら関わるというように考えられることがあるが、これは不適切である。実際アリストテレスにも、プロネーシスが目的と手段の両方に関わることを示唆するテキストがある (*EN*, 1142b32)。

思慮と目的との関係について、ここで、すでに述べた思慮と倫理徳との結びつきという論点を考え直してみよう。第2章の行為のモデルで言えば、目的の意図の層と、それ以降の具体的手段に関わる層とのあいだに、はっきりとした断絶を強調するよりも、むしろ、意図の層での意志と理性のはたらきがそれ以降も、行為の実現にいたるまでずっと残存し浸透していくということ、この点に注目すべきである。ふさわしい目的をとらえ、めざすことにはその人の倫理徳が反映しているが、その力が、具体的手段の思案・判断・命令という思慮によるはたらきに浸透していなければ、善い行為は実行できない。逆に、倫理徳のレベル、あるいは意図の層が潜在的に含んでいる善い行為の実現を、思慮がはじめて遂行するのだと言ってもよい。思慮が目的とまったく切り離されてはたらくと見なすと、思慮をまるで与えられた目的地への最短距離だけを計算するナビゲーション・システムのようなものと考えてしまうことになるが、これはトマスの (そしておそらくアリストテレスの) 真意にそぐわない。

たしかに、思慮は本来的には手段に関わる徳とされるのだが、だからといって、

「倫理徳が目的を把握する」とか「倫理徳が思慮に目的を提示する」と言われているわけではない<sup>14)</sup>。むしろ実際にはトマスは次のように言う。

思慮は目的にいたるための手段を選択する場面で倫理徳を導くだけではなく、目的をあらかじめ示す場面でも倫理徳を導く。(I-II, q. 66, a. 3, ad3)

思慮ある人は理性に属する普遍的な諸原理をも認識するし、行為の対象となる個別的なことがらをも認識する。(II-II, q. 47, a. 3, c)

思慮は手段と同時に目的にも関わり、個別的なものと同時に普遍的なものにも関わる。このように、思慮は目的と手段、あるいは普遍と個を結びつける実践知であり<sup>15)</sup>、原理原則と個々の場面とをつなぐある種の調停の知という性格をもつと言える。さらに、思慮は人生全体の共通の目的を意図するときえ言われている (II-II, q. 47, a. 2, ad1)。知的徳のはたらきとして「意図する intendit」という言葉づかいをするのは、トマスの用語法上やや厳密さを欠く印象も受けるが、これも、目的とそこへいたる手段とをもちともめざす思慮のはたらきの構造を言ったものだとして理解することができる。

こういうわけで、すでに述べた行為の実行との密接なつながりに加えて、逆の方向にも思慮のはたらきは広がっている。思慮は、倫理徳との相互依存、目的との強い結びつき、あるいは意図の層との連携によってはたらく徳である。こうして私たちは、行為の重層的な構造全体をつらぬく実践知として、トマスの倫理思想における思慮の重要性を再認識する。

### 注

- 1) viz., prudentia, iustitia, fortitudo, et temperantia. cf. ST I-II, q. 61, aa. 1-4.
- 2) それでもやはり、私たちが思慮と倫理徳との循環を問題だと感じることに、それなりの理由があると思われる。理由の一部は、私たちが完璧な徳という理想型を実感できないからだろう。諸徳の結合が実現されているのは、完全な意味での徳の場合だけだとトマスも言う (I-II, q. 65, a. 1, c)。
- 3) 究極目的までを視野に入れれば、諸徳の結合のかなめは最終的には愛 (caritas) であると言うべきだろうが (I-II, q. 65, aa. 2-4)、今回は残念ながらそこまで踏み込んで議論する準備がない。

- 4) この箇所では問題を立てて主題的に論じられている要素は順に、享受 (fruitio)、意図 (intentio)、選択 (electio)、思案 (consilium)、同意 (consensus)、行使 (usus)、命令 (imperium) である。
- 5) Circa agibilia autem humana tres actus rationis inveniuntur: quorum primus est consiliari, secundus iudicare, tertius est praecipere. (I-II, q. 57, a. 6, c.)
- 6) Consequenter considerandum est de actibus voluntatis qui sunt in comparatione ad ea quae sunt ad finem. Et sunt tres: eligere, consentire, et uti. (I-II, q. 13, introd.)
- 7) 『神学大全』のこの箇所では、アリストテレス、アウグスティヌスに加えて、ネメシウスとダマスケヌスの影響が大きい。次の著作は、この二人のシリアの思想家がトマスの行為論や情念論の重要な源泉であることを、テキストを分析して示している。E. Dobler, *Zwei syrische Quellen der theologischen Summa des Thomas von Aquin*. Universitätsverlag, Fribourg (2000).
- 8) 行為の構造を四つの層に分ける直接の根拠は「行為の理論」を述べた箇所には見出だせないが、たとえば II-II, q. 153, a. 5, c. では実践理性のもつ四段階の構造がはっきり述べられている。なお、四層に分けるアイディアは次の著作に学んだ。D. Westberg, *Right Practical Reason: Aristotle, Action, and Prudence in Aquinas*. Clarendon Press, Oxford (1994) pp. 119-121; p. 131.
- 9) non omnis actus voluntatis praecedat hunc actum rationis qui est imperium: sed aliquis praecedat, scilicet electio; et aliquis sequitur, scilicet usus. Quia post determinationem consilii, quae est iudicium rationis, voluntas eligit; et post electionem, ratio imperat ei per quod agendum est quod eligitur; et tunc demum voluntas alicuius incipit uti, exequendo imperium rationis. (I-II, q. 17, a. 3, ad1)
- 10) quia virtus prioris actus remanet in actu sequenti, contingit quandoque quod est aliquis actus voluntatis, secundum quod manet virtute in ipso aliquid de actu rationis [...]; et e converso aliquis est actus rationis, secundum quod virtute manet in ipso aliquid de actu voluntatis. (I-II, q. 17, a. 1, c.)
- 11) 別の言い方をすれば、行為のスペキエスを決定するものは何か、あるいは、行為の一性を保証するものは何かという問題である。この点について（思慮は強調されていないが）次を参照。C. Ripperger, “The Species and Unity of the Moral Act.” *The Thomist* 59 (1995) pp. 69-90.
- 12) ところで、prudentia というラテン語は英語やフランス語にその語形が引き継がれている。しかし、英仏語の prudence は保身や打算のための用心深さや抜け目のなさの意味あいをもつことがある。この概念にもともと含まれていたひとつの側面だけが強調されて現代語に引き継がれたわけだが、トマスの prudentia をこのようなニュアンスでとらえることはまるでの外れである。
- 13) cf. imperium et actus imperatus sunt unus actus humanus, sicut quoddam totum

est unum, sed est secundum partes multa. (I-II, q. 17, a. 4, c.)

actus interior voluntatis et actus exterior, prout considerantur in genere moris, sunt unus actus. (I-II, q. 20, a. 3, c.)

- 14) ここで、思慮・倫理徳・良知 (synderesis) の関係という論点が、アリストテレスにはないトマス独自の理論として興味深い研究対象になるが、この点の解明には別の論文が必要である。cf. I, q. 79, a. 12, c; I-II, q. 51, a. 1, c; q. 63, a. 1, c; II-II, q. 47, a. 6, c; ad1.
- 15) 実践知の構造について、次にあげるような異なったタイプの説明がトマスの議論には含まれている。(1)意図・思案・決断・実行などの要素を考える行為論のモデル(目的-手段型)。(2)大前提・小前提・結論からなる実践的三段論法モデル,あるいは法論のモデル(規範-実例型)。(3)思慮のはたらきの分析を中心とした徳論のモデル。これらの説明方法相互の関係をさらに詳しく考えることによって、トマスの倫理思想をより正確に理解できると思う。包括的な研究は今後の課題にしたいが、一部分は次でも論じた。松根伸治「実践知と意志の弱さ——トマス・アキナスの無抑制論」『哲学研究』575号(2003年)56~80頁。